

九州ルーテル学院大学

Teaching Portfolio

2026



所 属：人文学科 こども専攻 保育・幼児教育専攻

名 前：井崎 美代

作成日：2026年5月28日

教員氏名：井崎美代

所属：人文学部 人文学科 保育・幼児教育専攻

1. はじめに

学生が自身の学修過程や各種の学修成果を収集・記録するための学修ポートフォリオを作成するように、教員が自らの授業や指導といった教育面についての業績や努力を記録するティーチング・ポートフォリオ（TP）の作成が私立大学等改革総合支援事業タイプ1「教育の質的転換」の設問においても求められている。

そこで2020年に作成したティーチング・ポートフォリオの内容を更新することで、自分なりの教育活動の改善や成果を記録として提示し、大学が社会に対して教育活動を説明していくことができるよう取り組んだ。

2. 教育の責任

1993年に九州ルーテル学院大学の前身である九州女学院短期大学の助手として体育関連科目を担当する前は、熊本県立高等学校の保健体育教諭として5年間勤務していたことを合わせると教員生活も38年目を迎えている。公務員を退職して本学に勤務することになってからは33年目となる。この間に教員待遇研究員、人文学部兼任講師など短大から4年制大学への改組に伴う所属の変更を重ね、現在は九州ルーテル学院大学人文学部人文学科保育・幼児教育専攻に所属し、保育者養成に関する専門科目と全学生を対象とした共通教育科目の担当をしている。

(1) 授業科目の担当

2023年～2025年度の3年間は以下の表の科目を担当している。

科目名	開講年度時期	履修者数	備考
保育内容（健康）	2023-2025 後期	30名前後	保育・幼児教育専攻専門 選択、資格必修
レクリエーション論	2023-2025 前期	30名前後	共通教育選択
体育（小）	2023 後期 2023-2025 後期	39名 50名前後	こども専攻専門必修 児童教育専攻専門選択
健康科学論	2023-2025 後期	160名前後	共通教育選択 教職、保育士資格必修
保育実践演習	2023-2024 前期	30名前後	こども専攻専門選択
フレッシュマン・ゼミ	2024 前期	32名	共通教育必修
チャイルドケア・ゼミ	2023-2025 後期	30名前後	保育・幼児教育専攻専門 選択
こどもと健康	2023-2025 前期	30名前後	保育・幼児教育専攻専門 必修

スポーツ実技（こどもと運動）	2023-2025 前期	30 名前後	共通教育選択
スポーツ実技（卓球）	2023-2025 前期	35 名前後	共通教育選択
保育内容の理解と方法 I・II	2025 通年	32 名	こども専攻専門選択
特別研究	2023 後期	4 名	こども専攻専門必修
卒業研究	2024 通年	4 名	こども専攻専門必修

具体的には、保育者養成校の教員として保育士資格や幼稚園教諭一種免許状取得における健康、運動遊びに関する必修科目および教職必修科目としての「健康科学論」、資格必修科目としての「スポーツ実技」等を担当している。2022 年度入学生より、こども専攻保育コースが保育・幼児教育専攻となり、新カリキュラムが開始された。保育者養成課程の中で、これまで保育内容（健康）（演習 2 単位）と「体育」（演習 2 単位）で実施してきた内容が、保育内容（健康）と新科目「こどもと健康」（講義 1 単位）に変更になったために、運動遊びについて具体的に学びを拡げ深める機会が減少することにならないように、スポーツ実技（運動遊び）を新たに開講し、保育・幼児教育専攻学生対象の科目として実施した。

主要担当科目については以下の通りである。

■ 主要授業科目

「こどもと健康」

幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領における領域「健康」を踏まえ、保育者として理解しておきたい領域「健康」の内容について学修することを目的として開講した科目である。具体的には、子どもの発達特性と基本的生活習慣及び健康についての基本的な事柄や子どもを取り巻く状況について学修し、保育者としての資質を養うことを内容としている。

2022 年度入学生より適用された新カリキュラム実施に伴う新規科目である。保育者養成課程の中で、これまで保育内容（健康）（演習 2 単位）と「体育」（演習 2 単位）で実施してきた内容が、保育内容（健康）と「こどもと健康」（講義 1 単位）に変更となり、「領域に関する専門的事項：健康」として「理論」を中心に扱うこととした。

「保育内容（健康）」

幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領における領域「健康」を踏まえ、保育者として理解しておきたい領域「健康」の内容について学修することを目的として開講した科目である。具体的には、乳幼児の健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養うというねらいを達成するために、乳幼児の発達特性と基本的生活習慣及び健康についての基本的な事柄や子どもを取り巻く状況について学修し、保育者としての資質を養うことを内容としている。

2020 年度入学生より、こども専攻保育コースが保育・幼児教育専攻となり、新カリキュラムが開始された。「こどもと健康」で理論を、「保育内容（健康）」で指導法を取り扱うこととし、グル

ープによる「運動遊び」に関する指導案の作成および一人10分程度（グループの人数×10分）の模擬保育を実施し学びを深めている。

学部での教育以外の教育実践は以下のようなものがある。

■ 非常勤講師

・熊本大学教養科目「体育・スポーツ科学 a」「体育・スポーツ科学 b」（～2022年度、2024年度）
2006年から非常勤として授業担当を担当しているため、2024年度で18年目（2023年度は時間割の都合上担当せず）となった。2019年度からはターム制が導入され、8コマずつ第1タームおよび第2タームを担当している。種目としては「レクリエーション」（エアロビック、フライングディスク、ニチレクボール、ウォーキング、グラウンドゴルフ、ペタンク等）を実施し、35名前後を担当している。

(2) 教育組織運営

2023年度から2025年度の3年間は、障がい学生サポート委員会、自己点検・総合評価委員会、FD・SD委員会、教職・保育支援センター運営委員会、学院レベルの委員として安全衛生委員会、創立100周年記念 募金委員会の委員として大学および学院の委員としての役割を担っている。

3. 教育の理念

開学以来本学では、少人数教育による手厚い指導と机上での学修だけではなく、様々な体験学習を通して身に付けた幅広い視野や知識を卒業後に社会の様々な場面で生かせるような教育を目指してきた。それぞれの学科、専攻コースではさらに専門的な知識を身に付けることを目指すが、教育の根幹には他者に感謝し、他者に奉仕する「感恩奉仕」の精神を自ら実践できる人材を育成する教育を4年間で行うことが本学の教育理念であると考えている。

(1) 理念1

「苦手を克服し、得意を伸ばす」ことを常に発信し、取り組みを促す

保育者養成校としての開設当時から、グループワークを通しての学生の学びの充実は評価できるところである。ただ、「それぞれの得意を活かし、グループとしての成長」を実感できることは多いが、それはグループワークでそれぞれが苦手を補い、得意を発揮しているものの、自分の苦手に取り組み克服しているわけではないこと、グループワークを通してそれを個人の技術向上につなげる努力をしてほしいということを絶えず伝えるように意識している。また、オープンキャンパス等で保育コースの紹介を担当する際には、高校生にも伝えるようにしている。

また、保育現場における壁面構成に対応できるよう授業の中でも取り組みその成果を掲示等で公開しているが、加えて「子どもと一緒に制作する壁面」ではなく「大人が制作する壁面」の実践例を個人的に制作し、研究室前に掲示することにより、学生の意欲の向上を促す取り組みを継続している。

(2) 理念2

実践を通して、現場等で活用できる保育・幼児（児童）教育の専門的知識（技能）を身につける

学びを通じた専門的知識及び技能の習得を重視することはもちろんであるが、特に「人見知りなので話しかけてください」と自己紹介をする保育者（教育者）希望の学生が見受けられることもあり、恥ずかしがらずに実践をすることを通して「知っているとできるは違う」というような課題をさらに認識し、4年間を通して成長するような学生を育成することを目指している。

(3)理念3

科目での学びで完結するのではなく、学びを総合的に関連付け、保育コース教員で協力しながら取り組む

保育コース開設当初は、1年次の「フレッシュマン・ゼミ」、「チャイルドケア・ゼミ」、2年次の「保育内容の理解と方法」（通年）、3年次の「保育実践演習」はコース教員全員で担当していた科目である。それぞれの担当科目が増加したこともあり、現在では科目責任者とアドバイザー学年担当者を中心に担当することに変更してきてはいるものの、全員で協力しながら、4年間を通して学びを総合的に関連付けさせながら学生を支援するよう意識している。

具体的には、それまでの保育に関する学び等を踏まえ、保育士（者）としての必要な知識技能を習得したことを確認することを目的とした科目として開講されている「保育実践演習」は、「保育内容の理解と方法（保育の表現技術）」、学びの集大成として実施する「こどもフェスティバル」（3年次11月）と関連付けティームティーチングにより実施している。コロナ禍における感染拡大防止および学生の安全面確保の観点から2020年度および2021年度に中止した「こどもフェスティバル」は2023年度から本学チャペルでの開催を再開することができた事は評価できる。

4. 教育の方法

教育理念との関係では、以下の点を重視した教育方法をとっている。

(1) 実践（グループワークや模擬授業）を通しての学び

学生が自発的に授業に取り組めるようにするため、「演習」として実施している授業に関しては、事前学習での学びを掲示による提示や発表等を通したうえでグループワークや全体での実践につながるようにしている。（「保育内容（健康）」、「スポーツ実技（運動遊び）」「レクリエーション論」等）

特に、「保育内容（健康）」においては、模擬授業（保育）の実践方法として、実践者以外の学生は、①参加者（観察者）としての評価、②保育者（教育者）としての評価を実践者ごとに記名のうえ提出する。記名をさせるのは責任を持って評価をするためである。その後、原本は保存したうえで、コピーしたものを実践者別に分類し、加えて評価者名はあえて外した評価表を実践者にフィードバックするという方法を実施している。

(2) 視覚的情報を通しての学びの振り返りができる取り組み

特に「保育内容（健康）」の授業では、授業計画後半において、グループワークによる指導案作成（運動遊び）および1人10分程度（人数×10分）の模擬授業を実施している。実践をビデオ撮影し、希望する実践者には本人のデータのみをフィードバックしている。また、実践の導入として、過去の実践者のビデオを本人の了解を取ったうえで見せ、授業実践の参考にすることとしている。

(3) 経験者および現場からの学び

卒業生等からの現場での体験を通した声を、授業等を通してできるだけ届けるよう意識している。

授業としては「チャイルドケア・ゼミ」において、現場の先生方や先輩からの話を通して今後の学びの見通しを1年次生に持ってもらうことを意図して実施している。

また、現場からの学びとしては、ボランティアまたは観察者として付属保育園または併設幼稚園の運動会という行事への参加を推奨している。特に併設幼稚園の運動会には、毎年10名程度の学生とともにボランティアとして運営に参加している。希望者が多い年は、抽選等による選考をすることになるほどであり、参加した学生には現場の先生からの説明資料や説明方法からの学び、運営を通しての①園児（児童）の活動の様子、②保育者（教育者）の動き（プログラム進行上、子どもとのかかわりなど）の学びを促すことを心掛けている。運動会終了後の保育者および保護者と協力した片付け作業を通して、行事の成果を支える裏方の仕事（道具の搬入、搬入した道具全ての水拭き作業、国旗旗の補修作業等）についての現状を知り、また、先生方との反省会に参加することで、学生の視点で気づいたことや学んだことを発表する機会等を通じて、さらに学びを深める機会を得ていると思われる。加えて、現場の保育者から謝意が伝えられることにより「やりがい」を実感する機会ともなっていると思われる。

5. 教育改善のための努力

(1)改善努力1 授業評価アンケートと授業改善報告書

各学期終わりに実施されている学生による授業評価アンケート結果の数値評価と自由記述のコメントのうち、改善すべきと思われることは授業改善報告書に記載し、翌年度に改善するように心がけている。

ただし、授業初めにあえて説明を加えることもある。例えば、同じ授業における授業後のコメントでも「とても分かりやすかった。」「高校までの学びの復習ができてよかった。」と評価する学生がいる一方で、「難しく理解できなかった」というように、特に受講者数の多い科目においては、これまでの学びや知識の違いなどに差がある可能性が高く、授業の評価にも差が出やすいということなどである。

また、本学が「少人数教育」を特色として掲げていることにより、小学校教員養成課程の選択科目「体育」ではグループ別に授業を実施しているが、同じ授業を展開しているにもかかわらず学生による評価が大きく異なる場合があるため、できるだけ差が生じないように、それぞれのグループの授業における取り組み状況（授業の展開、課題の内容等）を画像や数値等でも紹介し、情報を共有するよう心掛けている。

(2)改善努力2

卒業生や保育現場からの情報収集

卒業時にも離職時や結婚による名前の変更等、保育コースのどの教員にでも構わないから連絡をしてほしいということは伝え続けている。卒業後1年目の夏に研修会を実施する「リカレント教育」を通して、卒業生の近況を見聞きすることはできているが、その他の卒業生のその後の動

向等については、事前に連絡をしてから大学に出てくる卒業生もいれば、突然大学に出てくる卒業生、育休中に子どもを連れて大学に報告に来てくれる卒業生も増えてはきているものの、卒業生全体としては情報を共有できている状況であるとは言い難く、縦と横のネットワークの弱さを実感するところであり、この点に関する改善は引き続き必要であると考えている。

また、保育現場の生の声を学生に届けることを継続していくためにも、さらに卒業生や保育現場とのかかわりを密にすることを心掛けたい。

6. 教育の成果・評価

(1) 事前学習での学びを掲示による提示や発表等を通したうえでグループワークや全体での実践につなげるようにしている科目（「保育内容（健康）」、「スポーツ実技（運動遊び）」「レクリエーション論」等）においての学生による授業評価アンケート結果からの教育の成果

・「全体として、この授業はあなた自身に役に立つものでしたか」に関し、「保育内容（健康）」では5点満点中4.52（2022年）、4.00（2023年）、4.82（2024年）、「スポーツ実技（運動遊び）」では4.92（2022年）、4.48（2023年）、4.42（2024年）、「レクリエーション論」では4.42（2022年）、5.00（2023年）、5.00（2024年）となっており、学びの成果が出ていると評価できる。

・「事前学修・事後学習の課題は授業に役立つものであった」に関し、保育内容（健康）では4.30（2022年）、3.63（2023年）、4.64（2024年）、「スポーツ実技（運動遊び）」では4.84（2022年）、4.52（2023年）、4.23（2024年）、「レクリエーション論」では4.42（2022年）、5.00（2023年）、5.00（2024年）となっており、事前・事後学修としての課題が学生にとって授業に役立つものになっていた。

このように、実践（グループワークや模擬授業）を通しての学びに関しての授業評価については、保育・幼児教育専攻の2023年度受講学生からの評価が他学年と若干異なるものの、一定の成果を挙げていると思われる。

(2) 視覚的情報を通しての学びの振り返りができる取り組み

特に「保育内容（健康）」の授業では、授業計画後半において、グループワークによる指導案作成（運動遊び）および1人10分程度（人数×10分）の模擬授業を実施している。実践をビデオ撮影し、希望する実践者には本人のデータのみをフィードバックしているが、実態としては自分の画像データを希望する学生数はあまり多くない。実践の導入として、過去の実践者のビデオを本人の了解を取ったうえで見せ、授業実践の参考にすること自体は学生にとって参考になっていることから、学生自身が学びの振り返りができるよう取り組みを今後も継続したいと考えている。

(3) 経験者および現場からの学び

卒業生等からの現場での体験を通した声を、本人の了解を得たうえで、授業等を通してできるだけ届けるよう意識している。また、転職した卒業生の状況から見えてきた保育業界が抱える課題についても学生と共有している点等は評価できるのではないかと考える。

また、現場からの学びとして2008年から実施している併設幼稚園における運動会へのボランティアまたは観察者としての参加推奨については、現場の先生からの説明資料や説明方法からの学び、運営を通しての①園児（児童）の活動の様子、②保育者（教育者）の動き（プログラム進行上、子どもとのかかわりなど）の学びに加え、運動会終了後の保育者および保護者と協力した片

付け作業を通して、行事の成果を支える裏方の仕事（道具の搬入、搬入した道具全ての水拭き作業、国旗旗の補修作業等）についての現状を知り、また、先生方との反省会に参加することで、学生の視点で気づいたことや学んだことを発表する機会等を通じてさらに学びを深める機会を得ていると思われる。加えて、現場の保育者から謝意が伝えられることにより「やりがい」を実感する機会ともなっていると思われるため、一定の成果を得られていると考える。

7. 今後の教育に関する課題と目標

今後の教育に関する課題と目標としては下記の点が挙げられる。

(1)実践（グループワークや模擬授業）を通しての学び

理念およびその理論を実現するための教育の方法でも触れているが、現場等で活用できる保育・幼児教育の専門的知識（技能）を身につけることを意識し、特に実践を通しての学びについては今後も重視して取り組んでいきたい。

2022年度まではグループ別（15人前後）に一人10分程度の模擬保育を一人ずつ行っていた「体育」に加え、「保育内容（健康）」での模擬保育（食育中心）を行っていたが、2023年度からは「保育内容（健康）」における模擬保育（運動遊び）のみとなったため、グループ別に実施してきた個人による模擬保育ではなく、グループによる模擬保育を実施することとなったことで具体的に課題が見えてきた。グループワークによる指導案の作成及び模擬保育の実践については、相談をしながら進められることによる長所とグループによっては役割分担における負担の偏り等の課題が見受けられたが、個人ではなかなか積極的に取り組むことが難しい学生にとっては相互の学び等を意識することで取り組みや実践が変化していくこと様子も見られた。準備に時間をかけられるよう、早い段階で周知することを今後も心掛けたい。

また、2024年度から保育・幼児教育専攻の保育実践コース推奨科目として「レクリエーション論」を加えた。2024年度は履修者が1名にとどまったが、十分に内容等を周知して学びを広げる努力をしたい。（結果として2025年度は保育・幼児教育専攻から15名の履修者となっている）

(2)視覚的情報を通しての学びの振り返りができる取り組み

特に保育コースの学生に「自分の実践している姿を映像で見る」、「発している声を聞く」ことを恥ずかしがる、嫌がる学生が多く見られる。いずれ人の前に立ち、人から見られる、評価されることにも慣れる必要があることを指導し、主観的にではなく客観的にも自分自身の実践の振り返りができるよう促していきたい。

(3)経験者および現場からの学び

すでに記載しているように、卒業後の状況把握があまりできていないのが現状である。卒業生とどのように連携し、卒業生を支えつつ、現場の声を活かした教育につなげていくか具体的に方法を構築していきたい。

8. 参考資料

(1) 担当科目シラバス

(2) 授業評価アンケート結果